

ている状況が続いています。そういう中で、いわゆる「反テロ戦争」とよく言われるのですが、これが本当に紛争を終わらせる方向なのか、あるいはむしろ紛争をこじらせる方向に行っているのか、基本的な課題として考えるべき大きな問題だと感じています。

それでは菅波さんから、活動の報告、個人のご報告をお願いしたいと思います。

「AMDA」の活動——菅波 茂

今日はこのような機会をいただいて、感謝しております。

AMDAの紹介をします。私たちのモットーは「尊敬と信頼の相互扶助ネットワーク」です。「困ったときはお互いさま」という世界の8割の人たちに分かるコンセプトです。お互いに助け合った時に、自分にはない素晴らしいものを相手に見つけた時に、尊敬の念が起きますし、相手が決して逃げないと分かった時に、信頼が生まれます。この尊敬と信頼の人間関係ができて初めて民族、宗教、文化といった差を超えることができるということです。このネットワークを作るのが、世界平和に向かって地味だけれども一番確実じゃないかと考えて活動しております。

私たちの具体的な人道援助の3原則があります。国境を越えますと、「なぜ私が来たのか」ということを言わなければなりません。その時に私たちは第1原則で「誰でも他人の役に立ちたい気持ちがある」と、そして第2原則で「この気持ちの前には国境、民族、宗教、文化等の壁はない」と、そして第3原則で「援助を受ける側にもプライドがある」と言っています。この援助を受ける側のプライドというのは、援助を受けている人も「自分も社会から必要とされたい、社会に認められたい」という人間としてのギリギリの尊厳を持っているのです。これを見失うと、変なことになります。

私たちは「AMDA多国籍医師団」という形で活動しています。これは小山内先生が経験されたことと、私たちも同じ経験です。あの湾岸戦争の時に日本の厚生省も医療チームを送りましたが、サウジアラビアで日の丸をどうするかということをもぐって崩壊しました。私があの時考えたのは、パキスタンとフィリピンと日本の三つが組んでいたら良かったのではないかとことです。なぜならば、パキスタンはサウジアラビアをよく知っています。そして同じイスラム教徒のスニ派です。だからパキスタンがまず入って、いろいろ案内してもらいます。そこにはたくさんのフィリピンの人が出稼ぎに行っていますから、本当に困っていたフィリピン政府も出せなかったところに一緒に出ます。そしてスポンサーの日本が一緒に行って、三つの国旗を並べることによって、日本はアジアの友としての存在感を示すことができたのではないかと考えたのです。私も



いずれはそういった意味で多国籍の医師団を作ろうと考えたのです。あの湾岸戦争が私の原点なのです。

これは2004年のスマトラ沖大地震・津波の時の活動ですが、ここにカンボジアのドクターが来ています（写真S-1）。今日はここに元駐カンボジア大使の今川幸雄先生ご夫妻が来られていて、私は報告ができて非常に嬉しいのですが、1995年に今川大使ご夫妻にはカンボジアのコンボンスプー州の郡立のヘルスセンターのオープニングセレモニーに出させていただきました。あの時にはAMDAカンボジア支部はまだ育っていなかったのですが、あれから9年経ちまして、AMDAカンボジア支部もこうやって海外に人を派遣するところまで育っています。今日はそれを報告できる場をいただいて、本当にどうもありがとうございます。

私たちは「相互扶助」というコンセプトで、現在アジア、アフリカ、中南米、カナダにネットワークを持っています。この前アフガニスタンにひとつ支部ができましたので、今、世界30カ国にAMDAの支部ができました（写真S-2）。これまでプロジェクトを実施したのは50カ国、そして50の姉妹団体を作っております。そして相互扶助というネットワークの中で、いろいろな仕事をしております。

私が「西のジュネーブ、東の岡山」ということを言いましたら、笑われたのですが、実は緒方貞子さんが国連難民高等弁務官に就任された時に、世界の難民に対して「いつか国連難民高等弁務官や国際的なNGOは帰っていかなければならない。誰があとの面倒を見るのか。それはローカルNGOじゃないか」と言われました。ローカルNGOとネットワークを組まないと何も片が付かないということを受けて私が考えたのが、「ジュネーブには世界の人道支援をしている国連機関や欧米のNGOが集積している。ローカルNGOのネットワークを岡山に持ってきたらどうか」ということでした。

ジュネーブの国連援助機関等は「なぜ人を助けるのか」という問いに対して、「それはヒューマンライツ（人権）でやっている」と答えるのです。ところが世界のローカルNGOというのは、実は「相互扶助」なのです。人権と相互扶助ではなかなかみ合わないのですが、幸いにして私たち日本人は人権教育を受けていますし、そして阪神大震災の時のように「困ったときはお互いさま」という相互扶助で動きます。したがってネットワークを岡山に持ってきたらどうか、そしてそれをAMDAが結んで世界平和に貢献したらどうか

第20回毎日国際交流賞記念シンポジウム

AMDA

AMDAの国際ネットワーク



世界30ヶ国にAMDA支部

これまでのプロジェクト実施国50カ国



(写真S-2)



(写真S-3)

「西のジュネーブ、東の岡山」と1994年に最初にこれを言った時には「お前、何を言っているのか。おかしいのではないか」と本当に笑われましたが、ようやく皆さんが納得して下さって、何とかなるんじゃないかというところまでこぎつけました。地域貢献と国際貢献を一緒にして岡山でやっております。そして実際に、岡山県の石井正弘知事が「国際貢献推進条例」を日本のどの自治体よりも先駆けて作ってくれました。

1995年に阪神大震災のあとサハリンで大きな地震が起り、私たちは救援機をチャーターして送りました(写真S-4)。私たちの通訳をしてくれた在留邦人の方が、「この『日本から救援機来る』ということがテレビで全ロシアに報道されて、今まで日本人は胸を張って表を歩けなかったのが、歩けるようになった」と言われたのです。一等市民はロシア人、二等市民は朝鮮半島出身の方、そして三等市民が日本人だったのです。日本から救援機が行ったことによって、そういうことがあったのです。その時に「戦後は終わっていない」と感じたのです。それから1996年の雲南大地震の時には、救援機をチャーターして岡山空港から送りました。今年の中国四川省の大地震の時にAMD Aが活動できたのは、雲南の時の人間関係が残っていて、その人たちと組んでやったからです。そして2001年のインド西部大地震の時には、イリュージンの96トンをも岡山にチャーターして向こうに送ったのです。現地の救援作業は人間が手でやっていますので、絶対にショベルカーがいるということで2台、そして1500枚の毛布、そして岡山市が緊急救援物資を一緒に出し

と考えたのです。

こういう趣旨で1994年から2002年まで毎年会議を開きました。そして、この写真はニューヨーク国連本部NGO委員会ですが、ようやく2006年10月にNGOの推薦で満場一致で、AMD Aが国連経済社会理事会の「総合協議資格」を取得しました(写真S-3)。皆さんご存じのように国連の加盟国は192カ国で、この「総合協議資格」は取るのがもっと難しいのですが、政策提言ができるのです。



(写真S-4)

とされたのです。それから1996年の雲南大地震の時には、救援機をチャーターして岡山空港から送りました。今年の中国四川省の大地震の時にAMD Aが活動できたのは、雲南の時の人間関係が残っていて、その人たちと組んでやったからです。そして2001年のインド西部大地震の時には、イリュージンの96トンをも岡山にチャーターして向こうに送ったのです。現地の救援作業は人間が手でやっていますので、絶対にショベルカーがいるということで2台、そして1500枚の毛布、そして岡山市が緊急救援物資を一緒に出し

てくれたのです。岡山空港はローカル空港なので、こういうことができるのです。この件によって私は離婚寸前にまでなったのです。大体発作的にチャーターするのです。この時、数千万円かかったのですが、段取りが狂って、ついにお金が入らなくなりました。女房が「どうするのよ。もう離婚だわ」と言っていたのですが、「浮気をした慰謝料と思えば我慢できるから、今回だけは許してあげる」ということになりました。



(写真S-5)

岡山に呼びました(写真S-5)。なぜ彼らがわざわざ岡山まで来たのか。レシャード先生が今お話をされましたように、当時は、アフガニスタンは40年間の内戦によって国中が難民キャンプのようでした。難民キャンプで子どもが死ぬ三つの原因は、風邪から肺炎になって死ぬ人が25%、そして不適切な飲料水を飲んで下痢から脱水症になって死ぬ人が25%、そしてもしワクチンをしていたら死なずに済む人が25%です。AMD Aが双方に「すべてのアフガニスタンの子どもがワクチンを終えるまで、停戦しませんか」と呼びかけましたら、双方は同意してくれまして、岡山まで来て署名をしているのです。ところがその後、2001年9月11日に米国中枢同時多発テロがあり、タリバン政権が崩壊したために、幻のワクチン停戦になりました。

しかし、2002年にアフガニスタン復興支援国際会議が開かれたのがドイツではなく日本になった本当の理由は、この時のアブドゥラさんと外務省との連携があったからです。そういった意味で、これは無駄ではなかったと思います。そして私が思うのは、いかに大人同士が相争っていても、やはり子どもは大人の希望ですから、子どものために停戦合意することがありうるということです。そしてもうひとつは、何もジュネーブでなくても、岡山のような田舎でも、明確なコンセプトと政策提言があれば、こういうことができるという実例かと思えます。

もうひとつは、1995年にこの席で私たちが第7回の毎日国際交流賞をいただいた時に、ネパールから来た3人がネパールの子どもの状況、母親の状況を説明しました。そこで毎日新聞社会事業団と組んで、ネパールに母と子どもの病院を作ろうというプロジェクトが提案されました。翌1996年の毎日新聞の「高野山夏季大学」に、私や建築家の安藤忠雄さんが

そういう実績をもって知事も元気を出してくれて、国際貢献推進条例は県議会が満場一致。岡山県民の意志として国際貢献をやらうと決まりました。これも1994年からの「西のジュネーブ、東の岡山」という大きなコンセプトの中で、こういう実績があったので、知事もついに動いたという話です。

次に「ワクチン停戦」なのですが、1999年1月にタリバン政権の厚生大臣、1999年2月にラバニ派政権のアブドゥラさん(外務次官)を

出たのですが、毎日新聞の藤原健さんに間に入らせていただいて安藤さんにお話ししたところ、「その趣旨なら私はボランティアで、ただで設計させてもらいます」と言ってくださいました。それがこの「AMDAネパール子ども病院」なのです(写真S-6)。今年で10周年になります。この病院は、首都のカトマンズ以外ではこういう保育器を持っている唯一の病院です。そしてこれは高知医科大学の外科の講師の先生ですが、日本からいろ

んな先生がここに来られますし、AMDA兵庫県支部からもナースの方がたくさん行かれました。そしてもしこの中(会場)に医療技術者の方がおられて、自分たちもここでやってみたいという方がおられたら、十分大歓迎ですので、是非行っていただければと思います。

ここでは年間に2000以上の出産があり、これまでの出生児は2万人を超えました。かなり大きな中核病院になりましたし、今はAMDAネパール支部独自で運営しているのですが、黒字になっているのです。私たちの夢としては、これを付属病院にして「AMDAネパー

第20回毎日国際交流賞記念シンポジウム



AMDA

ル医科大学」を作りたいと、次の10年の目標として上げています。もしAMDAネパール医科大学ができれば、世界のNGOの中で初めて自分たち自身の医科大学を持つ存在になれるんじゃないかなと、こういう形で夢を育んでいます。

「救える命があればどこへでも」ということが私たちのモットーで、世界中のネットワークの中で動いています(写真S-7)。

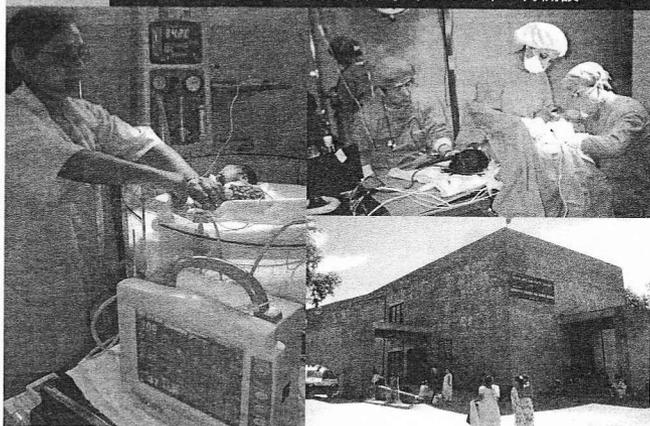
(写真はAMDA提供)

(写真S-7)

第20回毎日国際交流賞
記念シンポジウム

AMDAネパール子ども病院10周年
毎日社会事業団共同事業 1998年11月開設

AMDA



(写真S-6)